キブツは日本の進路を示唆す

本文は、キブツ研修生の家族の方々にもぜひ読んで頂きたい。そして、キブツの時代的な意義を理解してもらいたい。

手塚信吉

一、ニクソン大統領も『世界の協同体の皆さん』と呼びかける時代

「世界の協同体の皆さん」、これはニクソン大統領の就任演説の第一声である。

「私のなかま米国民の皆さん、そして私のなかま世界の協同体の皆さん、時代は平和にくみしている。最大の名誉は平和をきづくものにある。その名誉が、いまアメリカをさし招いている。……対立の時代がおわり、協同体の時代に入った。望んだだけでは平和はこない。……素晴しい正確さで月に到達できても、地球上では騒々しい不協和音になやまされている。吾々は戦争にとらわれ平和を渇望し、分裂になやみながら団結を渇望している。」

と数々の矛盾を指摘して国民の反省をうながし、最後に、

「地球の同乗者の皆さん、固い信念を抱いて目的に向かって着実に、危険に心をくばりながら、神の御心と人類の約束への信念に支えられて前進しようではないか。」

と結んでいる。

この時代的な理想を大統領就任の第一声として「世界の協同体の皆さん」と呼びかけながら、その理想に一歩も近づき得ず、アメリカ最大の癌となっているベトナム戦争の尻ぬぐいもできないまま、とうとうドル破綻を招来してしまった。

無名の小雑誌にすぎない「月刊キブツ」が十年も前に発刊第一号から連載した「アジアの天気図」と題した小文の中で、「アメリカの東亜侵略戦争は必ず失敗するであろう。毛沢東政権下の中国は大興隆するであろう。」と予言してあるが、その理由として、「時代は急変しつつある。もはや資本主義に神通力はない。それに代わるものは協同体の思想文化である。中国も北ベトナムも、その協同体国家に成長しているから、絶対不敗体制である。」と書いた。

それから六年後になると、資本主義の牙城アメリカの大統領までが、口先だけにもせよ、「世界の協同体の皆さん」と呼びかけざるを得ないほど、世界中に協同体思想が台頭してきたが、アメリカの大統領では、資本主義の足かせ手かせが障害となって、自縄自縛に陥り自国内にさえ協同体の片りんさえ示し得なかった。「望んだだけでは平和はこない。」、そのあせりが日本の頭越しに米中接近策となったのであろう。

「素晴しい正確さで月に到達できる時代に、地球上では騒々しい不協和音になやまされている。」と言ったニクソン大統領自らその不協和音の家元になっている。現在の世界では、アメリカが自重すれば、大半は波風が立たな

いであろう。無茶なベトナム戦争など、永久にアメリカの歴史を汚す不詳事である。

大アメリカの屋台骨がぐらつくほど巨額の戦費を費して支援した南ベトナムからアメリカが得たものは、敗戦の汚名と南ベトナム腐敗政治の助長だけであった。そして相手の北ベトナムは寸分も疲労の色をみせず、一人の飢民も難民もなく、百年戦争も辞さぬ意気ごみである。正に協同体国家の強さである。

狭い北ベトナムの全土に幾百万発の絨毯爆撃五ヵ年、数学的にも虫けら一匹生き残れないはずの北ベトナムは、蛙の面に小便で一向平気であるのに、魔訶不思議や、精も根もつきはてもてあましているのは、大国アメリカである。それは北朝鮮にしても、北ベトナムにしても、中華人民共和国と同様に、共産主義とか資本主義とかを乗り越えた、一国一家族体制であり、協同体国家に成長しているから、旧態資本主義国の月給取り軍隊などでは、とうてい歯が立たないのである。

最初は、ホーチミン政権下の北ベトナムを弱少後進国と侮っていたアメリカは、さんざん苦しみ、敵国から絶対不敗の協同体制を教えられたかっこうである。それがニクソン大統領の就任第一声の「世界の協同体の皆さん」となり、昨日まで最大仇敵と考えていた中国との接近ともなった。だが、米中提携にはまだ幾多の問題が残されている。国家性格の相違は氷炭あいいれないものがある。元来、資本主義という奴は、自分のために他人や他国を侵略したり搾取したりして物質的発展をとげ、他人の労働や資源を奪い、巧みに商品を売りつけて利潤を貪ったりして己れの繁栄を競う文化であるから、かつての中国も散々その犠牲にされてきたのだ。今の中国は、再びそんな資本主義の食物になるほど愚かではない。従って、米中握手のためには、まずアメリカ資本主義の性格改善が要求されるであろう。それが実は時代の要求でもある。

今から二百年前、世界の人口は六億あまりであった。南北アメリカ大陸にも各々百万人足らずの人間が住んでいた。大洋州などほとんど無人の原野にひとしかった。そんな時代には、競争が進歩に役立ち、侵略も開発に役立ち、営利の追求が生産活動の原動力となり、それが人類社会全体にとって弊害よりも被益がはるかに大であった。だからこそ、資本主義文化は発展すべくして発展したのである。

ところが世界の人口は六倍にも増加した。文化生活の発達から人間一人当たりの消費物資は十倍二十倍に激増し、資源の枯渇が問題になっている。そして、人間の知的水準が向上して、民主主義思想が普遍化し、人が人を搾取したり、不労所得や富の独占化を正当化している資本主義文化や経済では、社会の秩序が保てなくなっている。今日資本主義国が、なんとか国家秩序を維持しているのは、一寸きざみの社会主義政策で妥協しているためであって一種の誤魔化しにすぎない。だがそんな一寸譲歩の妥協政策では通用しない時代となってきた。中国の世界進出が次第にそれを立証してくれるであろう。

ドルショックで昭和元禄日本が長夜の夢をやぶられても、呑気な日本財界の人々は、下期ごろにはアメリカの経済界も回復し、対米貿易も正常化するであろうから、日本経済も安定するであろうぐらいに考えているが、それこそ時代の変遷を知らない考えだ。世界通貨としてのドル貨の転落は、アメリカ資本主義の転落を意味する。小細工をして一時は小康を保つことがあるとしても、覆水盆にかえらずで、威信の回復は不可能とみる。手持ちのドル貨を百六十億ドルも抱き込んだ日本はどうなるか。

窮余のドル対策からみても判るように、資

本主義本来の性格である自由経済力を失なったアメリカ資本主義が、延命のためには思い切った社会主義的計画経済へと移行する外はあるまい。だがそれは、かつてのアメリカ資本主義ではない。それは日本資本主義にとっては大打撃であるが、米中提携にとっては大きく役立つであろう。

なんといっても、歴史の浅いアメリカで因習旧慣の拘泥がないから転換が速い。ニクソン大統領就任演説の枕言葉に過ぎなかった「世界の協同体の皆さん」という呼びかけが、八億中国との握手となって具体化しつつあることは、日本の運命にも重大関係がある。

二、世界も変わる中国の台頭

どこかの国の妨害で国連入りが十年もおくれた中国が、昨秋の国連総会で絶対多数の賛成票を得て、安保理事会の常任理事国として参加した。その代表団の国連入りは、正に世界の夜明けを思わせるものがあったという。それもそのはず、世界人口の四分の一を占め、世界一の国家秩序確立の大国、その中国を除外した国連そのものがナンセンス以外の何ものでもなかった。

隣国の状勢も知らないあきめくら同様の日本の政治家、いや知らないのでなく、資本主義の牙城日本にみれんがあって、打算的に知ろうとしないのかも知れない。私が十五年前拙著『幌満川』の中で、毛沢東政権下の中国大隆昌を予言して「赤」扱いされたが、その当時の日本の新聞や雑誌にでる中国情報は、大半が台湾からのものであり、蔣介石軍の大陸反抗近しとか、中共に内紛勃発とか、良民が何十万人虐殺されたとか、毛沢東死亡説まで浮説をとばしていた。私は延安時代からの言動を注視して、革命政権のまじめさと清潔政治を思い、どうしても台湾情報を信ずる気になれなかった。殊に働くもの中心の正社会実現に精進する新中国は天理に合致し、良心が活かされており、共産主義として非難すべき何ものもないと思っていた。

いくら高文化を讃え、経済発展を誇ってみても、今の日本やアメリカのような、金銭万能の不平等社会では、一見どんなに安定してみえても永続性がない。蟻の一穴からでも崩壊する恐れが常にある。

序でに、十年前のことを書き加えておく。私がイスラエル国のキブツ社会を視察したのは、一九六二年であったが、そのキブツこそ人間社会の本当のあり方を示すものであり、行き詰った日本農業の新活路に大きく役立つものと考え、帰国早々その普及宣伝に東奔西走をはじめたのであるが、日本最初のキブツ解明書として、拙著『新しい農業キブツ』が世界ジャーナル社から刊行市販され、その一般の読者から共鳴や感激の手紙が六百通もきたのに、贈呈した総理府や農林省その他有力関係先からはナシのつぶてで、一枚のハガキもなかった。ところが知人の中国貿易商、干大海氏を通じて、中国政府に『新しい農業キブツ』と月刊キブツ四冊を贈呈したところ、早速反応があって、一九六三年十一月九日付で、中国日本友好協会秘書処から、干大海氏宛に私の中国訪問を歓迎するという、丁重な書面に接した。

その書状を干大海先生から受け取って、私は感嘆した。流石に古くて新しい国、真の民主主義国である。良いと思うものはアメリカからでも日本からでも、どんな非友好国に生まれた思想文化でも、公正克明に取り上げて検討し、役立つものは役立てる。その謙虚な態度こそ世界の至宝であると痛感したのである。

日本の政府でも、財界でも無名の野人にすぎない私の意見なぞ一顧もあたえないのに、

中華人民共和国では担当係がいて、ちゃんと精読している。早速中国を訪問して、更に詳しく内容を説明して参考に供すると同時に、人民公社の実情を視察研修したい、それには旧知の松村謙三翁の紹介状を持参する方が効果的であろう、と考えて訪問したところ、折悪しく病床にある由で、ご令息と対談の末、昼食までご馳走になり辞去したが、それからまもなく、韓国からの招待で、韓国各地をキブツ講演旅行をすることとなり、その後国内の各方面からの求めに応じて東奔西走する内に機会をなくしてしまった。

さて、中国共産革命は、火の手をあげて三十年目で世界中誰一人予想もし得なかった世紀の大事業が、中国農村青年の熱血により成しとげられた。だが、永い間、列国に半植民地化され、その上、一五年にわたって日本侵略軍に荒らされ、最後には、財貨の大半を蔣介石一派に持ちにげされ、残ったものはやせた大地と裸の国民五億余人だけであった。

そんな中から立ち上がって二十余年、毛沢東さんから一農民労働者まで、一切平等、綿服一色、協同協力、低生活に甘んじながら、七億五千万同胞一人の失業者も飢民もない、そして、幾千年不可能とされていた治山治水の大々事業も完成近しという。治安秩序の確立世界一、どんな中国嫌いの人々でも、一点非難の余地がないであろう。

だが建国日なお浅く、人心ことごとく安定したとはいえないし、なお、第二、第三の走資実権派の出現がないとも言い切れない。不世出の救世主、毛沢東さんにも天命天寿がある。そして、新中国でも人間社会であるから欠点も不平もあろう。従って、革命政権絶対安全とは言いきれないであろうが、人間尊重の精神が、一貫して平等、無搾取、皆労働を国是とし、その主柱を清潔政治においている毛沢東さんも、中国革命の成否は子孫三代清潔政治後に定まる、と予言している。

国家百年の命運を清潔政治におく倫理の革命、これは過去のいかなる革命にもなかった事績であり、新時代の新生活原理である協同体思想に合致するものである。仮に中途の挫折があったにしても、体制と方向の確立した中国の革命は必らず大成する。そして世界の中心国家として重きをなすであろう。

三、世界の孤児と化す恐れのある日本

米中提携は時間の問題である。そして、世界は米中ソ三国中心時代に移行する。ECの連邦化が成れば四大国世界支配時代が生まれよう。要するに、今後の世界は、この四大国程度の領土と資源と人口とが独立国家の資格条件となる時代である。そして日本の周辺をみると、北朝鮮もベトナムも中国を枢軸とする社会主義協同体国家であり、韓国も台湾も南ベトナムもカンボジアも、アメリカの保護あっての独立国にすぎない。米中握手成るとき、その帰すうは自ずから決まるであろう。

さて、日本はどうするか。GNP世界第二位とか、二十一世紀は日本の世紀だとか、そんな自惚れに酔いしれていられる日本ではない。

ニクソン爆弾二発で日本経済界は大混乱を呈した。あと一発くらったらひっくり返ってしまうであろう。日本経済はアメリカ無しでは成り立たないが、アメリカ経済に日本はいらない。いや反って米中経済提携の邪魔ものにすぎない。この点を考えて打つ手を改めて検討する必要があろう。

アメリカが、ドル貨の世界支配、東亜干渉政策の行詰まりを悟って、新活路を百八十度転回して、あれほど仇敵視した中国に握手を求めたことは偉い。新時代の社会秩序は最早

資本主義文化や経済では、アメリカといえども保てなくなっている。それを誰よりも敏感に悟っているのが、ニクソン米大統領であろう。その認識の上での米中接近であるところに、世界平和の一里塚として意義がある。

一億の競争相手を捨てて、八億の味方を迎えんとするニクソンさんの意図を知るや知らずや、頭越しの米中握手も輸入課徴金の急設もすべて日本への挑戦であり、狙いは日本の弱体化にある。従って、日本経済が挫折するまで決して手をゆるめないであろう。

だが、アメリカの対抗策を一方的に責める資格は日本にはない。日米輸出入比率が年々六対四、七対三と日本出超の片貿易で、日本製品の洪水でアメリカの業界は恐慌状態にあるという。自衛策は当然であろう。日本工業の発展は世界の脅威であり、その無秩序な市場荒しに各国とも手を焼いているという。片貿易の非難は、アジアでもアフリカでも爆発寸前にあるという。自粛自制の対策の確立は急務であるが、根本的には時代おくれの日本資本主義罪悪史の世界批判なのである。

「自己のために、他人や他国の領土や資源を侵略したり搾取したりして物質的な発展をとげ、巧みに商品を売りつけて利潤を貪り、己れの繁栄を競う資本主義文化」、これを今の日本人は当然と考えている。国内でも他人を犠牲にしたり、搾取したりして巧みに利潤を貪り私財を多く集めた奴が成功者と讃えられたり、栄耀栄華も勝手次第、位階勲章にもありつける。それが国の制度であり性格でもあるから、海外投資や貿易だけ互恵共存主義というわけには行かない。同一性格のアメリカ資本主義に便乗していた時代はそれでも通用したが、もういけない。

だが、今の日本の大人の世代は、金持階級だけでなく、農民や労働者まで、こちこちの個人主義者で自分の懐を肥やすことが大好きであるから、利他先行の協同体精神を説いても理解する人は少ない。だが、世界情勢は一変している。中国の台頭から東亜情勢も一変しつつある。米中接近以後の日本の立場は、ますます複雑であり、今の日本の大人の世代では対処できなくなろう。時代に目覚めた青年諸君への期待は大きく任務は重い。

四、キブツが日本の進路を教えている

私が、最初にイスラエル国を訪れてキブツを視察したのは、一九六二年であるから十年前であるが、永い半世紀にわたる人生体験から痛感していたことは、不平等社会の矛盾と労資対立関係の事業経営の不合理性であった。

キブツは、その二題とも見事な解答を与えてくれていた。そしてキブツを研究すればするほど、人間社会の本当のあり方を示しているので、このキブツの思想形態を日本に普及して行詰まった農業や中小企業の新活路にしたいと考えたのであった。

帰国早々、友人知己に話してみたが、当時はキブツを仏教の木仏金仏と早合点するもの理想の夢よと一笑するもの、協同体を共産主義と混同して警戒するもの等々、様々であり、ただの一人の共鳴者も得られなかった。その後、日本最初のキブツ解明書として、世界ジャーナル社から、拙著『新しい農業キブツ』が刊行市販されて、その読者から共鳴や激励の手紙が六百通もあったのに力を得て、私設の日本キブツ協会設立、月刊キブツの発行、会員の求めに応えて、全国的にキブツ講演旅行をも行なって、講演回数も五百余回に及んでいる。そして、キブツの名は全国的になって、四年後には有力者多数の参加を得て、社団法人日本協同体協会の誕生ともなった。一方、月刊キブツの会員を中心に希望者を年々

研修期限一ヵ年の日本青年キブツ研修生として、数十名づつを派遣して、既に八回二百三十八人に及んでいる。第九回キブツ研修生九十三名も、選考を終え、本年四月早々出発の予定で、目下国内研修中である。

キブツのような次元の高い生活原理は、利潤追求以外の経済生活原理を知らない大人の世代では、容易に理解できないのも当然であり、その点で、純心無垢の青年男女は、教養を高めるほど強い倫理観の持主となる本性から、真理に忠実で時代感覚も鋭敏だから、人間理想の良心的結晶であるキブツにひかれるのである。それがわずか五、六年で日本にも一種のキブツ旋風が起こり、年々研修生を希望する青年男女が激増している所以である。

だが、日本から一万キロも離れたイスラエル国で、往復の旅費が四〇万円もかかり、どこからも一銭の補助金もないのだから、浮いた気持で行くべきではない。まず、文献により、キブツだけでなく、協同体思想をよく研究して、己れの人生観との合致を確かめてから体験の場としてキブツ生活に入るのが賢明であり、是非お勧めしたい。言い古した解説であるが、次にキブツの本質にふれておく。

キブツの四原則

一、キブツは自由意志による団体である。だから、誰でも加入することも、脱退することも自由である。加入せんとする人は、一年位の試験期間をへて、本人が希望を申し出ると総会の多数決で決定する。脱退の場合も同様であるが、この場合は本人の在住年数やキブツの資産などを勘案して見舞金を、これも総会の決定により贈与する。

二、徹底した直接民主主義社会である。二千人の大キブツでも、長と名のつく人は一人もいない。すべて二年交替制の委員によって運営され、総ての決定は総会の多数決によっている。

三、集産主義社会であって、総ての財産は集団の所有である。

四、各人の能力に応じて働き、必要に応じて分配することを信条とする平等社会。

キブツは大は二千人、小は百人ぐらいの集団であり、それが二五〇集団近くあり、その人口はおよそ十万人、最古のキブツはすでに六十余年の歴史があり、誕生したばかりのキブツもあるので、必らずしも一様ではないが、この四原則の基本から逸脱してはいない。(もし、この原則の一部でも逸脱すれば、キブツではなく、モシャブ・シトフィーなどになる。それもイスラエルには沢山ある。)

そして、キブツは見事な協同体を形成し、一人の貧困者も不幸な者もなく、高い文化生活を営み、文字通りの理想社会であり、個人ではとうてい不可能なことが安易に行なわれ、分業と協力の真価で一日八時間一週六日の労働で、あとの十六時間は男女ともに全く自由の時間であり、主婦といえども、家庭の雑事も、育児の世話も必要としない。

キブツ社会を研究すると、「人類は協同体なり」という言葉の真実性が実にはっきりわかる。そして、百人の協力は一人の百倍でなく二百倍三百倍の価値があることを知ることができる。今の人間社会は経済的に発達すればするほど、個人主義化し、ますます不平等社会に変貌して、索漠とした非協力社会となり、人類全体を不幸にしている。それはキブツ社会をみるとはっきり判る。

平等、無搾取、皆労働、

人間平等観が徹底しなければキブツは成りたたない。集団の中に不労所得者を温存してはキブツは成り立たない。労働尊重こそキブツの生命である。この三条件がキブツの核であり忠実に実行されたところにキブツの健全な発展が約束されている。

自由平等が完全に活かされているキブツでは、人間最大の弱点である偽善も虚飾も嫉妬も羨望も必要としない全く嘘のない社会であるから、人々の心を豊かにし、明朗闊達生きがいある安定した毎日を送ることができる。この点、如何なる大富豪といえども、その安心幸福の点で、一キブツメンバーに及ばないであろう。日本国民も言論の自由、権利義務の平等が憲法で保証はされているが、より基本的な安定した生活の保証がない。経済的な裏付けのないものは、どんな名憲法であっても、それは絵にかいた餅に等しい。だがそれは、平和憲法の罪でも政府の責任でもない。個人主義個別対立経済を好む国民自身の自業自得の罪というべきである。個人主義に幸福なし、あってもそれは永続性がない。

キブツの本質内容、その特長をざっと書いても、月刊キブツ一冊満載になるほどであるから遠慮する外はないが、近頃各国ともに問題になっている農業や、中小企業の協同化、失業対策、貧乏征伐、保健衛生、育児教育、婦人解放、老人対策等々、人間社会の矛盾や不合理やなやみが、キブツを真似たら大半が解決するであろう。

五、キブツ研修生をなぜ送るか

今の日本が、このまま平和繁栄が永続すると思っている人はキブツなどに行く必要もないし、行っても辛棒ができないであろう。人生観がちがえば、キブツは永久にわからないし、わからないだけでなく邪魔になる。いな、日本人の大半は、頑固な個人主義者で、己れの出世や金儲けを人生の目的としている。そんな人々から見ると、キブツ人が馬鹿にみえるであろう。が、そんな個人主義者が私利私欲の鉢合わせで、九九%まで空しく虻蜂とらずで一生を終わっている。キブツはそんな愚かさに気付いた人の集団である。私は永い半世紀の社会体験から、個人主義に個人の幸福なしと言う立証から、キブツを絶讃している。

いよいよ国際舞台に巨歩を踏みだした中国の動向が、日本に及ぼす影響は大きいであろう。殊に、人民公社の視察者も激増するであろうから、一種の人民公社旋風が起こるかも知れない。こんな時期に私が日本の青年にキブツ研修をお勧めするのは、キブツが資本主義文化の中で健実に成長しているからである。

これから日本は東亜状勢の変化と共に大きく変わるであろうが、日本資本主義の牙城はそう易々と崩壊しないとみている。それは、資本家が強いとか保守党政治力が優勢だからではない。日本人は農民も工業労働者も個人主義者で、個別経済生活を好み個性的な文化人であるから、政治革命があってもソ連型や中国型の社会主義国に走らず保守的なイギリス型社会主義国がせいぜいであろう。人民公社は新時代的な社会形態ではあるが、それは中国型の政治性格で指導する必要がある。日本の革新政治はそこまで行かないとみている。

だから、日本では加入も脱退も自由な同志的結合体であるキブツが適していると思う。いずれにしても東亜の情勢変化とともに日本も大きく変わるであろう。これからますます民主主義化が進み人間平等観が徹底して資本主義的な搾取や不労所得や不平等社会の温存が困難になるであろう。即ち、時代は歩一歩と進んで、キブツ的な思想や形態が人間社会の新秩序となるであろう。前述したキブツ四原則は、一般社会でも一部譲歩したり、二部妥協したりして、取り入れざるを得なくなってくる時代となって来た。従って、一人でも多く青年男女が、キブツ協同体を研修理解することは、最も有意義であると確信する。

書評

集団主義教育の問題点

篠原睦治著『キブツのこどもたち』（誠信書房）

高田武彦

現在、日本の高校生の間に〈退廃〉が次第に深化しつつある。私の勤める学園でも、次々と各種事件が生み出され、叱責、停学、退学などと多くの生徒処分がおこなわれている。平気で捨てられるゴミが、学園の至たる所に散らばり、うるおいの少ない薄汚れた環境のなかで、受験を第一義にした生活が続けられていく。生徒のなかに、クラスや学校の仲間としての連帯感は希薄となっている。生徒たちは、ごく少数の遊び仲間やグループの関係にのみ埋没することになり、学校は偶然の宿に、ホーム・ルームは無縁の過客の集合にすぎなくなっている。教師もまた、〈ことなかれ主義〉になったり、また反対に、何らかの秩序や規律をつくり出すために、生徒に各種強圧を与える教育がなされてきている。このような種々の矛盾をふまえ、学園に生気をとりもどすことができる集団主義とは何であろうかと考えながら、『キブツのこどもたち』を読んでみた。

著者、篠原氏は、一九六六年七月から約三ヵ月間、シリア国境に接するキブツを中心に滞在し、心理学的調査、討議などで得た資料をもとにキブツのもつ意義と、集団主義教育下の子どもたちについて考察している。内容は、(1)キブツの成立と発展、(2)キブツの現在、(3)キブツの育児と教育、(4)乳幼児期における対人関係と行動、(5)小学生の対人関係と教育・文化活動、(6)青年期における人間形成、(7)モサッド生徒の意識と行動、(8)モサッド卒業の青年、(9)G・レビン氏との一〇の質疑、から成り立っている。

(3)までは、キブツの概況についてふれつつ集団主義的な構造と機能をもつキブツの体制のなかでの集団主義教育の理念と実践等の位置のなかでの集団主義教育の理念と実践等の位置づけをおこなっている。キブツの教育について、著者は、①メタペレットによる専門的育児や男女同室の生活、自発性の尊重などの〈科学的、合理的な教育〉がおこなわれ、②しかも、親子の独立や仲間集団の強化などの基礎となる〈親子分離を原則とする集団主義教育〉を保守、発展させ、③究極的には〈キブツの維持、発展と国家的責務を負うキブツ的人間の形成〉と三つのステップを述べ、その特質を明らかにしている。

著者が調査したキブツでは、高校卒業の十八才までの男女同室制をとり、また親子別居がきちっとおこなわれている、いわばキブツらしいキブツのようである。しかし、親子分離の原則をとり除いたキブツも少なからずあり、この場合どのような集団主義教育体制になるのか興味がでてくる。また、ここに述べられる〈国家的責務〉には、ナショナリスチックなひびきがあり、またキブツのもつ〈社会主義〉制についても、もう少し考察してもらいたかったと思う。

(4)以後においては、調査、観察、話合い等を精力的におこなった結果をもとに、乳幼児期から高校卒業生までの子どもたちの生活を段階的においながら、キブツ的人間の形成過程を生き生きと叙述している。

乳幼児の〈よく泣き〉、〈よくケンカ〉するなかで、一歩一歩相互統制や相互学習をし、人格の成長が促進されていく子供たちを中心に、メタペレットと母親の間におこる葛藤、『自分たちの子どもは自分の手で育てたい』という母親などをからませ、親子別居のなかでの育児の意義について説明している。

小学生においては、〈両親に対する期待〉〈教師への期待〉などの調査等から、対人関係での発展と、キブツ社会にくみこまれた労働、芸術活動や、キブツの祝典への積極的な参加などを通じて、キブツ集団への同一化に進む過程がえがかれる。

モサッド（中高校）の生徒については、「面接などで資料を直接的にえられやすかったということも手伝って、力を入れて叙述」（序論）されており、大変興味深く読んだ。

生徒たちは朝六時半の起床にはじまって、夜十時すぎまで、授業、労働、両親との接触、クラス討議、自治活動、若者運動、集会、映画会等でおいまくられ、充分な自由時間がとれないでいるようだ。

キブツ独特の、プロジェクト方式にもとずく教科教育、若者運動、グループ討議などのイデオロギー教育、社会的な生産労働と教育の結合が体制的にくみこまれた教育制度、性教育等にふれたあとで、徹底した集団活動のなかでの個人問題を論じている。

「自分がグループに受け入れられているか確信がないので、みんな、グループによって受け入れられるのに一生懸命なの」と十七才の男子である。「ほとんどの人は、社会的要請によって、社交的に行動しているふりをしているのです。私は、人々とうまくやっていかなくてはならないのです。私は、自分の部屋で読書しながら、一人でいることの方が好きです」とは一七才の女子である。大方の者に、仲間間のかなり深刻な葛藤、緊張、嫉妬、ねたみなどがあるようだ。

そして著者は、『モサッド生徒は、日常の集団生活においては、仲間との関連で自己を十分にエンジョイさせることも、自己との関連で他人をエンジョイさせることもかなり困難なように思われる。それは仲間集団適応の過度の努力、葛藤が大きすぎるし、それを怠たることは、集団生活が制度化されている以上、それが制度的にも心理的にもむずかしくなってくるからである』と述べ、さらに、「理想の自己」についての質疑から、「全体として、集団志向的人間を自己の理想とするキブツ人間像が認められるが、集団が、仲間からキブツに広がりつつも、それがそれより大きな社会につながっていかないことに、モサッド生徒の限界がある」との見解を示しているが、興味深い問題である。自発性の尊重、個性の育成、試験、留年制がないとか、キブツの教育は体制的に保障され、温床的な環境の中でいる子どもたちも、徹底した集団生活の遂行とキブツ世論の前に、かなり厳しい逃げ道のないような立場におかれていることがわかる。受験体制のなかで、心底ピリッとした状況に追い込まれたことのない日本の子どもたちの精神状況が思いやられる。

ごく最近のキブツからの報告をみると、長髪の子が目立ってきたり、マツペンやシャツハに新左翼運動に関心を持つ子がでているという。世界情勢が変わるなかでキブツの教育も新しい動きがおこってくるのではないだろうか。我々も、日本において人間的にふれあいが重視される集団主義教育を考え、実践していきたいと思う。

（評者は第四次キブツ研修生。現在、高校教諭）

ヘブライ語の書きことば、生きた文法の手本は何といってもヘブライ語の本、新聞、手紙です。使用国のイスラエルにあっても、ヘブライ語を新しく学ぶ移民者、外国人が、毎年何千人といるため、イスラエルでは、やさしいヘブライ語の（日本流にいえば、かなふりの）本や新聞が種々発行されています。あなたも、東京にあるイスラエル大使館、キブツ協会、ユダヤ人協会 (J.C.C.) などを利用して、本物のヘブライ語文字を手にしてみませんか。求めよ、さらば与えられん！　イスラエル人との直接文通は、何より貴重な機会です。はじめは英語で書いて、少しずつヘブライ語を教えてもらうのです。ヘブライ語の構造は、既にお気付きのように単純です。古い原始的な言葉が母胎ですから、英、仏、独、露の言葉のように、複雑微妙な規約がありません。カギのような活字体、絵のような筆記体の文字になれさえすれば、ヘブライ語独習も可能です。

イスラエルの文豪アグノン（1966年、ノーベル文学賞受賞）のヘブライ語も、今は日本人の手によって直接訳されました。（『ノーベル賞文学全集、15。スタインベックとアグノン』村岡崇光訳、主婦の友社刊。）　また、現代ヘブライ語の解説を日本語訳して、聖書物語や聖書も出されるようになり、ヘブライ思想が紹介され始めています。（『聖書の世界』講談社。『聖書』日本聖書刊行会）

現代ヘブライ語はこれからです。皆さんもいつか何かひとつ読んでみませんか、ヘブライ語で。　何か話してみませんか、ヘブライ語で。　イスラエル人と、手紙で交流してみませんか、ヘブライ語で。

一年間、この講座をお読み下さりありがとうございました。

תּוֹדָה רָבָּה. שָׁלוֹם

> The wish is father to the thought. הָרָצוֹן אֲבִי הַמַּחֲשָׁבָה.
>
> ハラツォン　アビー　ハマフシャーバー
>
> 願っていると、どうすればよいか自然に思慮、良い案が生まれてくる。

※制作部より—10回にわたる「現代ヘブライ語講座」も今回で終わりになますが、ご批判とご意見をお寄せ下さい。第1回目からの バックナンバーも少々残っていますから、ご希望の方は、事務局の方までお申出下さい。

現代ヘブライ語講座　第10課（最終回）

עברית חיה
イブリット・ハヤ

担当　西本とみ

一年間のヘブライ語講座も終わりました。まとめとして二、三、気のついたことを書いてみましょう。

どんな言葉も、会話が先に生まれました。文法が先にあったのではありません。ですから外国語を学ぶ最良の道は、その言葉を話す人々の生きた雰囲気にふれ、その中で驚き恥をかきつつ体得していくことです。東京渋谷のJCC (Jewish Community Center. ユダヤ人協会）では、イスラエル人によるヘブライ語会話が、毎週行なわれています。また、レコードによるヘブライ語の話や歌も楽しい教材です。

旧来ヘブライ語といえば、二千年前以上に書かれた「聖書のことば」としか考えられませんでした。外国に散在して暮らしていたディアスポラのユダヤ人も、彼らの民族の言葉がどう話され、どう読まれていたのかわからなくなっていました。従って聖書に関する文献だけがヘブライ語として残され、人々には死語と思われたのも無理はありません。非常に有名な聖書のヘブライ語学者には、ドイツのゲゼニウスがいて、詳細な文法書を残し世界的に利用されました。("Gesenius' Hebrew Grammer"　出版は、Oxford.) 現在は、イスラエルのベン・イェフダによって再生された新しいヘブライ語による、現代ヘブライ語辞典や参考書が種々使われています。ベン・イェフダやアルカライの "English-Hebrew,　Hebrew-English Dictionary" が多くの人に親しまれています。アメリカには、"Modern Hebrew" としていくつかの参考書、文法書、会話の本が出ています。

日本語のヘブライ語文法書は三冊あります。小辻節三、左近義慈、片山徹の各氏が書かれていますが、どれも旧約聖書をよむためのもので、古典ヘブライ語といわれているものです。（『旧約聖書ヘブライ語入門』片山徹著。キリスト教夜間講座出版部。）